仲澄物語の位相

――『うつほ物語』作中人物覚書――

大井田　晴彦

はじめに

『うつほ物語』前半部の中心をなすあて宮求婚譚には、多くの個性的な人物が登場する。とりわけ異彩を放つのが、源正頼の七郎、源仲澄であろう。正頼家の後継者として将来を期待されながら、同母妹あて宮への禁じられた恋により身を破滅させてしまう、その短かった彼の生涯はきわめて印象的である。あて宮の入内によって多くの男たちが破滅するが、落命するのは仲澄だけである。仲澄については、あて宮との禁忌の恋の側面が重視されがちだが、仲忠との友人関係も重要である。また、仲澄は、あて宮の春宮入内後、その死によって物語から退場するが、しばしば回想され、その存在は忘れられることなく、深刻な影を投げ続けている。あて宮にとって最も近く、最も遠い存在である仲澄の物語について、本稿では考察したい。

一

仲澄は、首巻「俊蔭」の巻末に早くも登場している。既知の人物のように、「仲澄の侍従」と何の人物紹介もなく、語り出される。藤原兼雅の三条殿での相撲の還饗に出席し、仲忠の弾琴に源仲頼・良岑行正らとともに深く感銘し、落蹲を「折り返り舞」う。共感した仲忠もまた「もろともに舞ひ遊ぶ」（六一頁）のであった。この還饗は、貴族社会への仲忠の本格的なデビューを意味するものであり、楽才に秀でた友人たちとの出逢いの場であった。以後も彼らとは交流を深めてゆくことになる。藤侍従と源侍従、前途明るい名門の貴公子、仲忠と仲澄は、すっかり意気投合する。[1]

「あさましく、大将殿の強ひたまひて、琴仕うまつらせたまへるに、困じにたり」とて、御氷召して参る。そこに、仲澄の君おはしければ、対面して、物語したまふ。仲忠、「（ア）内裏にては、時々対面たまはする時侍れど、細かなることは聞こえさせず侍りつるを、いとうれしくもおはしましけるか

な。」仲澄、「（イ）はなはだかしこし。仲澄も、聞こえさせむと思ひたまへながら、え聞こえさせずなむ。」仲忠、「（ウ）上にさぶらひなんどする折も、おとど一所放ちたてまつりていささかあひ後見たまふべき人もなかめれば、心細くなむおぼえ侍るを、いかで、かたみに、近う語らひ聞こえ侍らむ。内裏にも、この頃はをさをさ参りたまはぬは、いかなることにか」と言ふ。仲澄、「（エ）いかなるにか侍らむ、乱り心地悪しう侍れば、宮仕へもし侍らずなむ。」仲忠、「（オ）など、さものせさせたまふらむ。もし、見ぬ人恋ふる御病か。」仲澄、うち笑ひて、「（カ）今は、葵も用なきものを」と言ふ。仲忠、「まこと、宮にも、『殊なる親族もなかめり。君を、深き契りをなして、語らひ聞こえよ』となむのたまはせし。」「仲澄にも、しか仰せられて、『少将・兵衛佐、はらからの契りなしたり。君達も、さる契なせ』となむ仰せられし。」仲忠、「いとうれしきこと」など、かたみにのたまひて、仲澄、「いといたう酔ひて、えつぶさに聞こえず」と言へば、仲忠、「日ごろ思ひたまへつることを取り申しつるなむ、今宵の喜びに侍る」と言ふ。「今、かの殿にさぶらはむ」とて、仲澄まかでぬ。　（俊蔭・六一～六二頁）

（ア）および（イ）によれば、仲忠も仲澄も、互いに懇意となることを願っていたが、宮中で時おり顔を合わせるだけで、なかなかその機会に恵まれなかったという。更に仲忠は、兄弟のない自分には父兼雅の他に宮中で頼るべき人がなく心細い、どうか親しくしていただきたい、と切り出す。続いて、最近は、宮中でもお目に掛かれないが、どこか具合でも悪いのですか、と尋ねる（ウ）。いかにも名門の貴公子らしい、礼儀正しい、ややかしこまった感のあるやりとりである。心配する仲忠に対し、仲澄は、近頃は気分がすぐれず、参内も怠りがちなのです、と答える（エ）。その「乱り心地」の語を押さえ、仲忠は「見ぬ人恋ふる御病か」と言う（オ）。「我こそや見ぬ人恋ふる病すれあふひならでは止む薬なし」（拾遺集・恋一・六六五・詠み人しらず）により、恋煩いのせいでしょう、と冗談めかして尋ねるのである。初対面の相手にさえも、その女性関係を問わずにはいられない、恋に憧れる、好奇心旺盛な青年仲忠像が見事に形象されていよう。痛いところを突かれた仲澄は「うち笑」い、そのばつの悪さをやはり「今は、葵も用なきものを」と引歌によって紛らわすしかない（カ）。私には恋しく思っている人がいないので、その恋の病を治すという「あふひ」（「葵」と「逢ふ日」の掛詞）も必要ありません、の意。同じ和歌の語句を用いながら、巧みに仲忠の追及をかわしたことになる。

このように、仲澄は、深い憂愁の影を帯びた貴公子として物語に登場する。仲澄の悲劇は最初から予感されていた、といえようか。そして、その憂愁は仲忠が見抜いたように、恋の煩悶に由来していた。「左大将殿にこそ、さるべき世の有職は籠もりためれ

ど、また、をかしき君たちあまたありて、心もやらめ。そこならではあらじ」と「人知れず思」い、「異心なき」（五六頁）仲忠であるだけに、仲澄の恋に敏感なのである。とはいえ、仲澄の恋の対象が誰であるか、恋の真相には思い至っていない。それはそれとして、二人は「はらからの契り」を結び、またの訪問を約束する。仲忠が仲澄と懇意になったのは、何よりも仲澄の人柄に親しみを感じ、友情を覚えたからである。しかし、それだけではない。仲澄と親しくなることで、その妹あて宮に接近したい、という思いもまた、当然あったはずである。

二

仲澄の人物については、第二巻「藤原の君」にいたって、はじめて紹介される。左大将源正頼の七郎で、母は大宮、年齢は兼澄（大殿腹）と同じく二十五歳であるという（六九頁）。大宮腹の子女たちの中でも、特に仲澄とあて宮は仲むつましい兄妹だったようであるが、あて宮が十二歳の二月に裳着をし、成人を迎えると、仲澄の思いは恋へと転じていったらしい。世の多くの男たちに混じって、彼もまた求婚譚に加わることになる。

夕暮れに雨うち降りたる頃、中島に、水の溜まりに、鴆といふ鳥の、心すごく鳴きたるを聞きたまひて、侍従、あて宮の御方におはして、かく聞こえたまふ。

「池水に玉藻沈むは鴆鳥の思ひあまれる涙なりけりとは御覧ずや」と聞こえたまへば、あやしう思して、いらへ聞こえたまはず。この侍従も、あやしき戯れ人にて、よろづの人の「婿になりたまへ」とをさをさ聞こえたまへども、さもものしたまはず、この同じ腹にものしたまふあて宮に聞こえつかむと思せど、あるまじきことなりければ、ただ、御琴を習はしたてまつりたまふついでに、遊びなんどしたまひて、こなたにのみなむ、常にものしたまひける。

（藤原の君・七八頁）

雨の降る夕暮れ時、物寂しく鳴く鴆鳥の声にあて宮への恋心を押さえがたく、「池水に～」の歌を詠む。「鴆鳥の　二人並び居」（万葉集・巻五・七九四・山上憶良）という雌雄仲睦まじい鳥であり、潜水する習性から「鴆鳥の潜く池水心あらば君に我が恋ふる心示さね」（同・巻四・七二五・大伴坂上郎女）のように、表面には見えない、秘めた恋心を連想させるものでもあった。かかるイメージを揺曳させつつ、直接的にはやはり「玉藻」を詠んだ「春の池の玉藻に遊ぶ鴆鳥の足のいときなき恋もするかな」（後撰集・春中・七二・宮道高風）を踏まえ、表に出せない恋心を沈潜する玉藻に喩えて美しく詠んだ歌である。このような歌を詠み掛けられ、あて宮は不審に思うしかない。仲澄が、多くの縁談を断り続けるのも、あて宮への想いゆえである。ちなみに彼のかかる態度は「よろづの人、住まずとは知りながら、婿取りたまへど、

夜を重ねたまひて訪ふなし、あやしき戯れ人」（嵯峨院・一九〇頁）という仲忠のそれによく似ている。

仲澄は琴の指導にかこつけてあて宮に接近する。ここから想起されるのは『源氏物語』「総角」の次の場面であろう。

時雨いたくしてのどやかなる日、女一宮の御方に参りたまへれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覧ずるほどなり。（中略）在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかが思すらむ、少し近く寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくもてなさせたまふこそ」と忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかと思すに、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきてこぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが飽かずめでたく、少しもの隔てたる人と思ひ聞こえましかばと思すに、忍びがたくて、

若草のねみむものとは思はねどむすぼほれたる心地こそすれ

御前なりつる人々は、この宮をばことに恥ぢきこえて、物のうしろに隠れたり。ことしもあれ、うたてあやしと思せば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、されて憎く思さる。

（新編日本古典文学全集⑤三〇三～三〇五頁）

禁足が厳しくなり、中君の待つ宇治にも訪ねて行けない匂宮は、同母姉女一宮の許に参上して鬱屈した思いを晴らそうとする。二人は、とりわけ紫上が愛情を注いだ仲の良い姉弟である。我が姉ながら「二つなきもの」「この御ありさまになずらふ人世にありなむや」とまで匂宮は思っている。「少しもの隔てたる人と思ひ聞こえましかば」と嘆くように、匂宮にとって最も近くて最も遠い姫君が女一宮である。匂宮の、姉への思慕をいっそう掻き立てるのが、ちょうど眺めていた『伊勢物語』の絵であった。定家本四十九段は、次のとおりである。

昔、男、妹のいとをかしげなりけるを、見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ

と聞こえけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな

いつの間にか妹に恋心を抱いてしまった男が、堪えきれずに思いを告白してしまった。妹がいずれ他の男と結ばれてしまうことへの不安と未練を訴える。妹は信じ切っていた兄から告白され、驚きと当惑を覚えた、という話である。それはともかく、定家本では琴についての言及が見えない。妹の歌の「言の葉」が「琴」を連想させはするものの、琴の存在は明示されない。「妹のいとを

かしききんをしらべけるをみて」（最福寺本）や「妹のいとをかしげなるきんをしらぶとてみをりて」（時頼本）などの本文は、むしろ「総角」の叙述を承けて生じた後の本文であろう。しかし、現存はしないものの、兄が美しい妹に琴を教えているうちに恋情を抱くようになった、という物語・話型はいくつもあったのではないか。そのような物語の影響のもとに、「藤原の君」や「総角」の場面が生まれたと想像される。

三

続いて、仲澄の詠歌について見てゆきたい。合計二十四首の歌を仲澄は詠んでいる。「春日詣」「桂」「吹上下」に唱和歌が一首ずつ、「菊の宴」に屏風歌が一首見える他は、すべてあて宮への贈歌という顕著な特徴をもつ。あて宮からの返歌を得ることが稀であるのは、他の求婚者たちと変わらない。

侍従の君、御琴遊ばすついでに、

人を思ふ心いくらに砕くれば多く忍ぶになほ言はるらむ

例の聞き入れたまはず。　（藤原の君・一〇二頁）

「人を思ふ〜」は、あなたを思う心はいくつにも砕いているので、多くの心を忍び隠していてもおのずと口に出してしまうのでしょう、の意。ここでも琴の演奏によせて想いを告げるものの、あて宮は取り合わない。「例の」とあるように、かかるやりとりが恒常化していることが知られる。

源侍従の君、出で入り、起き伏し、嘆きたまふ。いとわびしくおぼえければ、御前の花薄の中に、今、もとより生ひ出づる葉、秋も穂に出でぬを引き抜きて、その葉に、かく、

「思ふことといかに知れとか花薄秋さへ穂にも出でで過ぐらむ

あなわびし。いつ、かく」など書きて、見せたてまつりたまへば、九の君、

「もろともに生ふる薄のいかなれば穂の出でぬ物を思ふてふらむ

かかる仲」とて、尾花を添へて奉りたまふ。侍従、「さればこそは、わびしけれ」と聞こえたまふ。

（嵯峨院・一六八〜一六九頁）

思い余った仲澄は、同母妹の八君にあて宮への想いを打ち明け、驚かせるが、不憫に思った八君は、それとなくあて宮に兄の想いを伝えるのだった。もちろん、それは気休めにもならないけれども。想いを抑えがたい仲澄は、秋になっても穂の出ない薄を贈る。「石上布留の早稲田の穂には出でず心のうちに恋ふるこのころ」（万葉集・巻九・一七六八・抜気大首）、「花薄我こそしたに思ひしか穂に出でて人に結ばれにけり」（古今集・恋五・七四八・藤原仲平）のように、胸に秘めた想いが表面に現れてしまうことが「穂に出づ」である。いつまでも想いを打ち明けられない

苦しみを訴えたのである。あて宮は、穂の出た尾花を差し出し、一緒に親しく生い育った兄妹の間柄を強調して、仲澄の「思ひ」を否定するのが精一杯である。

「人を思ふ〜」や「思ふこと〜」あるいは「潮の海も身に包まるるものならばかひなきまでも知らせざらまし」（藤原の君・九一頁）のように、胸に秘めた想いを忍び、打ち明けられない煩悶を訴えるのが、仲澄の和歌の特徴である。

五月五日、つとめて、長く白き根を見て、侍従の君聞こえたまふ。

涙川汀の菖蒲引く時は人知れぬねのあらはるるかな

と聞こえたまへど、聞き入れたまはず。侍従の君、「かく思したるを、思ふやうなる御心と後ろやすけれど、返す返す思ひ忍ぶれど、えあるまじければこそ、死ぬる身と思ひたまへて聞こゆれ。二所に聞こえたらむことは、人の知るべくもあらぬを、いみじうこそおはすれ」と泣く泣く聞こえたまへば、「など、かくのみはのたまふぞ。誰と思したるぞ」などのたまふ。（祭の使・二〇六頁）

端午の節句の、菖蒲の長い根に寄せて、苦衷を訴える。涙川の汀の菖蒲を引き時は、人に知られない根が洗われてあらわになるが、私も音をあらわにして泣いています、くらいの意。深い泥中にあって人目につかない長い根は、やはり仲澄の秘めた想いの比喩である。困惑するあて宮は、ここでも「誰と思したるぞ」と、兄妹の間柄を強調することで、尋常ならざる仲澄の懸想を逸らそうとする。右の歌では、悲しみに溢れる涙が川となる、「涙川」が詠み込まれているが、これもまた仲澄詠に特徴的な表現である。他に「人知れぬ涙の川とながるるをいかで溜まれるみづと答へぬ」（春日詣・一五一頁）、「こひをのみたぎりて落つる涙川身をうき舟のこがれますかな」（菊の宴・三四〇頁）、「臥しまろび唐紅に泣き流す涙の川にたぎる胸の火」（あて宮・三五六頁）の例が見える。また、前掲「藤原の君」の「池水に〜」も同様の発想によっている。仲澄の詠歌に頻出する「涙川」は、『古今集』哀傷の巻頭歌（八二九）に由来していよう。

妹の身まかりにける時よみける　小野篁朝臣

泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさらば帰り来るがに

妹を恋う涙が三途の川を氾濫させて、妹をこの世に戻してほしいと願う。この歌を原点として、篁と異母妹の恋、そして妹の死を話題とする『篁物語』が成立した。琴ならぬ漢籍を教えているうちに、兄妹は恋仲になってゆくのであった。妹でなく兄が死ぬという点は異なるけれども、仲澄とあて宮の物語には、篁の妹との悲恋の物語が投影しているとおぼしい。

紀伊国より、

常よりも夏越の月のわびしきは忌むてふことのなきにぞありける

と聞こえたまへるを、君たち見たまふを、侍従の君、取りて

見て、端にかく書き付けて、あて宮に奉りたまふ。

人はいさ夏越の月ぞ頼まれし瀬々の禊に忘らるやとて

とて奉りたまへど、誰も誰も聞こえたまはず。

（祭の使・二二二頁）

吹上の源氏、涼も求婚譚に加わり、手紙を寄越してきた。嵯峨院の落胤という、有力な求婚者の登場である。涼の歌は、結婚の忌み月である五月が過ぎてしまった焦燥感を詠む。その端に仲澄が書き付けた歌は、他の人はさあどうだかわからないが、私は夏越の六月を頼りにしていました、瀬々の禊にあなたへの想いを忘れられるかと思って、の意。「恋せじと御手洗川にせし禊神はうけずもなりにけるかも」（古今集・恋一・五〇一・詠み人知らず、伊勢物語・六十五段では第五句「なりにけるかな」）を踏まえる。あて宮求婚歌群においては、求婚者たちの、互いに無関係な歌が羅列されるのが常であり、例外的なものといえよう。他の求婚者たちの動向を知り、一喜一憂するのも、常にあて宮の側にいる仲澄ならではである。とはいえ、彼が求婚譚において優位に立っているわけでは、まったくない。むしろ最も遠い位置にあることは変わらない。

四

あて宮の関係は、当然、一向に進展するはずもなく、仲澄は苦しみに悶え続ける。その一方で、仲澄と仲忠の友人関係は、どのように語られてゆくのか。

仲忠の侍従、内裏よりまかづるままに、左大将殿の御門に来て叩くに、かの殿の侍の別当藤原員親会ひたれば、「仲忠がさぶらふよし、侍従の君に聞こえたまへ」とのたまへば、入りて聞こゆれば、「なほ、こなたに」とて、御曹司に呼び入れたてまつりたまひて、対面したまへり。仲忠、「（ア）一日、あさましく食べ酔ひて、対面たまはりけるを、いかになめげなる様侍りけむ、そのかしこまりも聞こえさせむ、とてなむ参り来つる。」源侍従、「（イ）はなはだかしこし。一夜の無礼はありもやしけむ、さらにおぼえ侍らぬは、仲澄が酔ひこそすすみてはべりけめ」などのたまひて、うつくしく物語などしたまふ。「（ウ）仲澄、かく、一人のみなむ侍る。時々は立ち寄らせたまへ。まかり通ふ所などもなければ、つれづれとなむ侍る」とのたまへば、「（エ）などかは、さはおはする。仲忠こそ、内裏へ参るよりほかに、まかる所なけれ。君達のおはする所は、牛の毛ぞや」あるじの侍従、「（オ）仲澄がまかる所、麟の角にだにぞあらぬや」などのたまふ。物語などいと細やかにして、なほ、かたみに後見など言ひ交はして、帰りたまひぬ。

（嵯峨院・一五九頁）

「嵯峨院」巻頭、前掲「俊蔭」巻末での約束を承けての、仲忠が正頼邸の仲澄を訪問する場面である。別当に取り次ぎを依頼して

から対面に至るまでの、「仲忠の侍従〜対面したまへり」の叙述は、煩雑でもどかしい印象を与えるが、かかる例は、この物語に多く、いわば基本型でもある。対話の後に、「かたみに後見など言ひ交はして、帰りたまひぬ」と退場が語られるのも同様である。仲忠と仲澄の会話は、これら前後の叙述に枠どられるかたちで挿入されている。

初めに、仲忠が話を切り出す。先日の還饗の際にお会いした時には酔い過ぎておりまして、何か失礼な事でも申し上げてしまったかと、そのお詫びかてら参上いたしました、と（ア）。それに応じて仲澄は、わざわざお出で下さって恐縮です、あなたが失礼なことをなさったのかどうか、それが記憶にないのは、むしろ私の方が酔っ払っていたのでしょう、と応じる（イ）。「うつくしく」とあるように、ここまでの二人のやりとりは、いかにも良家の子弟らしい、やや改まった儀礼的な挨拶と評すべきものでしかないが、話がはずむに従って、いかにも好奇心旺盛な青年らしい話題へと転じていく。（ウ）の仲澄の「まかり通ふ所などもな」いとは、ふと口をついて出てしまった言葉であろう。だが、仲忠はそれを聞き逃さない。（エ）の「牛の毛」は多いもの、（オ）の「麟の角」は希少なもののたとえである。これは、「為者如牛毛、獲者如麟角」（抱朴子）、「学如牛毛、成如麟角」（顔氏家訓）などの漢籍によっている。典拠を踏まえることによって、かなりきわどい内容も朧化され、知的な会話が成り立っている。拾遺集歌が引用されていた、「俊蔭」巻末の会話とよく似たやりとり、繰り返しとなっていよう。「物語などいと細やかにして、なほかたみに後見どもなど言ひ交はして」とあることように、かかる言葉の応酬を通じて、二人は胸襟を開き、友情を深めていく。

かくして二人は絆を強めてゆくが、実は二人は肝心なことには口を閉ざしたままである。兄弟のない仲忠が、仲澄と「はらからの契り」を結び、交誼を願っていたのは偽りない本心である。しかし、右の引用の直後には「仲忠、あて宮にいかで聞こえつかむと思ふ心ありて、かく来ありくになむありける」とも語られている。あて宮への恋の橋渡しを期待して仲澄に接近していることは否めない。そして、あて宮への秘めた恋を抱いている仲忠だからこそ、仲澄の恋の相手が気になるのだろう。しかし、その恋の煩悶の対象が、あて宮であることには気づいていない。親しい仲忠といえど、実の妹に恋しているなどとは、どうして打ち明けられようか。二人の間には強い連帯感、共感が芽生えたが、それでもなお、互いの心の奥底にまでは降り立つことはできない。二人の恋の対象がともにあて宮であるというのも皮肉である。仲忠にとっての仲澄、仲澄にとっての仲忠は、互いにあて宮への秘めた想いを映し出す鏡のような存在といえようか。機知に富む会話の表面的な明るさとは裏腹に、これらの対話の場面は、彼らの孤独で鬱屈した内面をも浮き彫りにしてしまってもいるのである。

五

仲忠と仲澄の対話の場面を引き続き見てみよう。ここでも典拠を用いた機知的な会話となっている点に、まずは注意されるのである。

（仲忠）「（ア）御前に、三宮にあさましく強ひられたてまつりて、物もおぼえず食べ酔ひにけり。このついでに聞こえむことは、罪もあらじな。神も許したまふとか言ふ」とて、物語のついでに、「（イ）一日、春宮にて、悲しき心地もせしかな。やがて、御前にて死ぬとおぼえし、いかで、今日まで侍るならむ。」侍従、「（ウ）あやしのつぐら虫や。」中将、「（エ）されど、臥しぬる牛の心地ぞするや。」「（オ）ぬしは、異筋になりたまへる人にはあらずや。何をか思す。」中将、「（カ）玉の台もと言ふ。源中将の君（涼）こそうらやましけれ。」侍従、「（キ）角折れたる牛の譬ひなりや。」中将、うち笑ひて、「（ク）むくり犬のあいな頼みのやうに。」「（ケ）いで、ぬし、おほけなうなおはせそ。かの人（女一宮）は、ただ今の世の一にて、内裏にもここにも、雲居より降りたるよりも、ことに思ひ聞こえたまふ人を。さるついでに、しか仰せられぬ。かかる身を持ちて、なぞ、このはかな言は。」中将、「（コ）かしこけれど、心魂を尽くして聞こえ初めたるを、ここには、身を変へても、いかでとは、え思ひたまへ寄らぬは、いとかしこきぞや。」侍従、「（サ）薬の杵は、いかにぞ。」中将、「（シ）実のなる桃食はぬ心地ぞするや。」

（菊の宴・三〇八～三〇九頁）

正頼家の神楽が果てた後の二人のやりとりである。この前には残菊宴で春宮が正頼にあて宮入内を強く要請したことが語られている。涼にあて宮を、という神泉苑での宣旨も反故にされてしまった。求婚譚はいよいよ大詰めを迎えつつある。神楽では各人の「才名のり」が披露されたが、明るい雰囲気の中、求婚者たちの内心の動揺は並々でない。神楽も果てて、仲忠は仲澄の許を訪ねる。酔いに紛れて、胸の内を打ち明けようとする。神事での戯言は、神も大目に見てくださるだろう、と切り出す（ア）。（イ）の「一日、春宮にて、悲しき心地もせしかな」とは、残菊宴で春宮が正頼に、あて宮入内を強引に承諾させたことをいう。仲澄は、そうした仲忠を「あやしのつぐら虫（蝸牛）」と評するが（ウ）、「上達部、親王たちは、供人まで物かづき、物の節まで禄たまはりぬ」とあることから、禄を多く被けられた仲忠の様子、さらには女一宮を賜るはずの仲忠のことをたとえたか。内親王の降嫁を約束されても、あて宮入内を嘆く仲忠の態度を贅沢として難じたのだろうか。（エ）の「臥しぬる牛」は、「蝸牛」と「臥牛」の音の連想により、たくさんの禄をもらい過ぎて身動きのとれなくなった様子をいうのだろうか。（オ）の「異筋」とは、女一宮降嫁を許され、帝の婿になることをいう。（カ）の「玉の台」は、

「何せむに玉の台も八重葎生へらむ中に二人こそ寝め」（古今六帖・第六「葎」三八七四）による。金殿玉楼に住むよりも、葎の生い茂る宿で愛する人と一緒にいられるほうが幸福であるという。身の程もわきまえずに降嫁への不満を洩らす。また涼が羨ましい、というのは、「涼にあて宮」という宣旨が出たことではあるまい。あて宮と結婚できないのなら、独身を続けていたい、女一宮と強引に結婚させられる自分よりも、宣旨が反故にされた涼が羨ましい、という意ではあるまいか。（キ）の「角折れたる牛」とは、角を折られて闘志を失った牛のことで、すっかり気落ちしている仲忠のさまをいうのだろう。源順の「無尾牛歌」（『本朝文粋』巻一）なども想起される。（ク）はお預けを食ったむく犬が、あてのない約束を頼りにし続けている、という意であろう。涼への宣旨も覆されたのだから、女一宮降嫁の話も信頼できようか、という仲忠の皮肉めいた自嘲だろうか。（ケ）の仲澄の言葉は、遊戯的な典拠をもたないが、仲忠のあまりの未練がましさに嫌気がさしたということだろう。（オ）と同様、仲忠のおおけなさを咎めている。仲忠は、仲澄の「かかる身」の言葉尻をとらえ、「身を変へても」と転じ、再び言葉遊びに引き寄せてしまう（コ）。変身という神仙譚的発想から「薬の杵」が導かれ、さらに三千年に一度実をつけるという西王母の桃へと連想が及ぶ。「身」と「実」の掛詞ともなっている。この神聖な珍しい果実を食べられない、とは、あて宮を得られないことの愚痴である。

ここで仲忠は、酔いも手伝ってか、冗談めいた愚痴を一方的に喋り続ける。仲澄は、醒めた態度で、言葉を差し挟むに過ぎない。仲忠の友人として、またあて宮の兄として、仲忠を宥め、窘める役を演じ続けなければならない。聞き分けない仲忠に呆れ果てた仲澄は、しばしば会話の流れを断ち切ろうとする。もちろん、あて宮の入内に落胆、絶望しているのは仲澄とて同様である。仲澄は失意の仲忠に、自身の姿を見ているといえよう。

六

実は、仲忠と仲澄の対話の場面は、さほど多くはない。四つの場面に過ぎない。次に挙げるのが、その最後の例である。

藤中将、侍従の君は、馬を並べ、手綱を交わして、物語をするついでに、「（ア）世の中の楽、遊びなどは、吹上の浜にて尽きにきと思ふを、殿にこそ、取り犯されずなりにけりな。宮あこ君の御舞、君の御笙は、三千大世界に敵はあらじかしな。そが中にも、ことと今日の馴らし譜の声は、いみじかりつるものかな。源氏の中将、仲忠らが耳は、身にも添はで、かの御琴のあたりに。」侍従、「（イ）いかにぞ。多かりつる心地せられつらむ。」中将、「（ウ）かの御ためには、さは、そも、ひが者とぞ思ふや。」「（エ）いづこより来し。くらまてふ山よりや。」中将、「（オ）いさや、恋てふ山まで

も」など、けしからぬ戯れしつつ、殿まで帰りたまひぬ。

（菊の宴・六一六〜六一七頁）

嵯峨院大后宮の六十賀の帰途、馬上での二人の会話である。仲忠は、正頼主催の賀宴を見事なものとした、宮あこ君の舞と仲澄の笙を大げさなまでに褒めちぎる。とりわけあて宮の琴の演奏が格別だったという。自分と涼の耳は、身から離れて、あて宮の琴に引きつけられそうだった、という（ア）。実際、仲忠は、自分と酷似したあて宮の琴に魂を揺さぶられる感動を覚えていたのだった。（イ）は、底本（前田家本）のまま「多かりつる」だとやや意味が通じにくい。仲澄が卑下すべきところだから、角川文庫のように「おほなかりつる（軽々しい）」、あるいは新編日本古典文学全集のように「おぼめかしかりつる（頼りない）」などと解するべきか。（ウ）は、あのあて宮のために偏屈な世の拗ね者になってしまいそうです、くらいの意。（エ）の「くらまてふ」は底本「きてう」を改める文庫の説に従う。文庫は、恋に狂った「ひが者」浄蔵大徳が鞍馬に籠もった話（大和物語・百五段、今昔物語集・巻二十・三）を出典とする。その連想で（オ）の「恋てふ山」の語が導き出されてくる。「いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人惑ふらむ」（古今六帖・第四「恋」一九八〇）の例もあるが、直接には「あぢきなや恋てふ山はしげくとも人の入るにやわがまどふべき」（一条摂政御集・九八）に拠っていよう。この歌を踏まえるとすれば、あて宮が入内するとて私は惑うまい、恋の山路を踏み分けて強引にあて宮を得るまでのことだ、という意になる。実際に仲忠が乱暴な振る舞いに及ぶわけではないが、日常的な言葉では語られないきわどい内容が、既知の和歌を踏まえることで朧化され、会話として成り立っていることになる。

語り手が「けしからぬ戯れ」と言うように、ここでも他愛ない言葉遊びとして場面が収束してしまう。しかし、この明るいやりとりとは裏腹に、二人はそれぞれ、以前にもまして深い絶望へと沈潜してゆく。そもそも、この六十賀は、あて宮入内について大后宮の了承を得るために催されたものであり、弾琴の成功は、あて宮が将来の国母にふさわしい存在であることを人々に印象づけた。仲忠にすれば、あて宮の琴に深く感動しつつも、賛嘆の言葉を重ねれば重ねるほど、自分とは決して結ばれることはないという空しさがはね返ってくるのであろう。一方、仲澄がこれまで以上に寡黙であるのも注目されよう。既に仲澄は死へと傾斜しつつある。この場面を最後に、二人の対面が描かれることはない。結局、仲澄が死へと向かってゆく真の理由、それがあて宮への禁じられた恋であることに、仲忠は気づかなかったらしい。

七

かくて、あて宮春宮に参りたまふこと、十月五日と定まり

ぬ。聞こえたまふ人々、惑ひたまふこと限りなし。その中にも、源宰相（実忠）、御兄の侍従は、臥し沈みて、ただ死ぬべしと惑ひ焦られて、いみじう悲しきことども書き連ねて、日々に書き尽くし聞こえたまへり。御返りなし。惑ひ焦らるる中にも、源侍従、心一つに思ひて、臥し沈みて、湯も水も絶えて死ぬべきに　（あて宮・三五三頁）

あて宮入内の日取りも確定した。多くの求婚者が惑乱するなかでも、源宰相実忠と仲澄の狼狽は尋常でない。季明、正頼の子息たちの中でも将来を嘱望された二人が破滅してゆくことは、源氏の前途多難を予測させる。

かかるほどに、「侍従の君、人面も知らず、くちをしうなりぬ」とののしる。宮、おとど、かつは思し嘆き、かつは参りのこと思し急ぐ。（中略）あて宮、心憂しとは思せど、宮聞こえたまへば、渡りたまふ。宮、おとどの住みたまふ北のおとどに臥したまへり。あて宮、その頃、御かたちの盛りなり、丈五尺に今少し足らぬほど、いみじく姿をかしげに、御髪のうるはしくをかしげに、清らなる黒紫の絹を瑩せるごと、生ひたる限り、末まで至らぬ筋なし、めでたきこと限りなし。今日は、まして心ことに見えたまふ。兵衛の君、孫王の君ばかり御供にておはしたり。侍従の君、見たてまつりたまひて、とみに物も聞こえたまはず。からうして、「今日や参りたまふ。御送りをだに、え仕うまつらずなりぬること。生きてまた対面賜はらむこと、難くもあるかな」と、涙を流して聞こゆ。あて宮、「心にもあらずのみなむ。いでや、などかは、かくのみはものしたまはむ。」侍従、「なほ、え侍るまじきにこそ侍るめれ。よろづのこと、心細く悲しきこと」と聞こゆ。あて宮、「さな思し入りそ」とて立ちたまふ。

臥しまろび唐紅に泣き流す涙の川にたぎる胸の火

と書きて、小さく押し揉みて、御懐に投げ入る。あて宮、散らさじと思して、取りて立ちたまひぬるを見るままに、絶え入りて息もせず。宮、おとど、あるが中にもかなしき子のかかるよりも、よろづの故障をしのぎて思ひ立ちたまへる御参り延びむこと、この度せずなりなば、つひにせずなりなむこととと思すに、ただ惑ひに惑ひたまふ。（中略）かく、皆集ひて、御車寄せて、「時なりぬ」と聞こし召すままに、いみじく悲しき言をのみ聞こえつれど、耳にも聞き入れたまはぬ心地ながら、かく聞こえたまふ。

「別るとも絶ゆべきものか涙川行く末もあるものと知らなむ

な思し入りそや。」　（あて宮・三五五〜三五七頁）

仲澄は人事不省に陥ったが、正頼は逡巡しつつも、予定通り、あて宮の入内を決行するのだった。あて宮は兄を見舞い、入内の挨拶をする。病臥する仲澄の眼に、可憐な妹の姿が焼き付けられる。これまで具象性に乏しかったあて宮の美貌が詳細にたどられ

るのは、初めてのことである。興入れを前にして、その美しさはいっそう際立ってくる。これがこの世の別れになることを強く自覚する仲澄を、あて宮は「な思し入りそ」と繰り返し慰めるばかりである。余力を振り絞って、仲澄は「臥しまろび～」と詠む。悲しみに身もだえして唐紅の血の涙を泣き流す、その涙の川には胸の火が熱くたぎっていることです、の意。里である三条院を離れ、参内する時は刻々と迫っている。あて宮の「別るとも～」は、別れても私たち兄妹の仲が絶えることなどありましょうか、涙川がいったん分かれてもまた合流するように、将来またお会いできるものと知ってください、の意。あたかもこの場面は、『竹取物語』の昇天の場面を思わせる。[2] 宮は入内を「心にもあらず」、不本意というが、かぐや姫も「心にもあらでかくまかる」と言っていた。また、「御車寄せて」とあるのも「屋の上に、飛ぶ車を寄せて」（『竹取物語　現代語訳対照・索引付』八五頁）とあるのを連想させる。瀕死の仲澄を残し、後ろ髪を引かれる思いで、あて宮は生まれ育った三条院を去り、参内する。

かくて、侍従の君も、参りたまへりし日、なくなりたまひにしかど、御消息に懸かりてありつる、御思ひは月日に添へてまさり、身は弱くなりつつ、え堪ふまじくおぼゆれば、あて宮に、かく聞こえたまふ。

「いひ出でてもつひにとまらぬ水の泡をみごもりてこそあるべかりけれ

かくまで、聞こえであるまじくおぼえしかば、聞こえ初めて、侍らざらむ世にも、いともいともいみじう厭はしければ、いでや、あが君の御ためには、身のいたづらになりぬるも思ひたまへず、今一度の対面賜はらずなりぬるを思うたまふるなむ」と聞こえたり。あて宮、見たまひて、あるが中に、いかでと思ひ聞こえし人の、あやしき心の見えしかば、つらしとはおぼえたまひしかど、かう心細くのたまへること、心憂く、など、この君にしもかく思されけむ、など思して、かく聞こえたまふ。

「同じ野の露はいづれもとまらねどまづ消ゆとのみ聞くが苦しさ

かく承るも、いとほしうなむ」と聞こえたまふ。侍従、見たまひて、文を小さく押しわぐみて、湯して飲き入れて、紅の涙を流して、絶え入りたまひぬ。殿の内揺すり満ちて、惑ひ焦がれたまふこと限りなし。あて宮、聞こし召して、いみじく悲しと思す。

（あて宮・三六七頁）

仲澄は絶命したのではなかった。あて宮の「別るとも～」の歌が、かろうじて露命を繋いだのである。しかし衰弱は著しく、回復は見込めそうにない。最後の力を振り絞って宮中のあて宮に歌を贈った。「いひ出でても～」は、思いを口に出しても留まらない水の泡のようなはかない我が命なのですから、水の中に籠もるように、思いを胸の中に秘めておくべきでした、の意。「池水の

いひ出づることの難ければみごもりながら年ぞ経にける」（後撰集・恋四・八九〇・藤原敦忠）と同様、「いひ」に「言ひ」「樋」「みごもり」に「水籠もり」「身籠もり」を掛ける。やはり禁じられた恋心を忍ぶ、いかにも仲澄らしい歌である。あて宮の宮中からの返歌「同じ野の〜」は、同じ野の露――一緒に育った私たち兄妹――は、どちらもこの無常の世に長く留まりませんが、お兄様が先だって消えるとばかり聞くのが苦しいことです、の意。「とまら」を共通語句とし、贈歌の「水の泡」を同じくはかない「露」に転じて応じた。兄妹の関係を強調して仲澄を慰めようとする。返歌を得た仲澄は、ついに世を去った[3]。兄の死に立ち会えなかったあて宮は、宮中で悲しみに暮れるばかりであった。

むすび

あて宮の多くの求婚者たちの中でも、唯一落命した仲澄は、とりわけ悲劇的色彩の強い人物である。その悲劇性は、あて宮の同母兄であることに起因していた。あて宮に最も近く、そして最も遠い存在である。彼が死をもって物語から退場するのは必然だったといえよう。仲澄は仲忠と親交を結ぶが、その交友もあて宮への恋の憂愁を払拭できず、むしろ孤独な懊悩を深めてゆく。

（あて宮）「今一つ、人には聞こえで、心地にいみじく悲しと思ふこともありや。」（中略）（祐澄）「侍従の上に侍らずや。御徳に損ひたまひてし人ぞかし」女君、「常に、夢にぞ見えたまふや」とのたまふままに、泣きたまふ。

（蔵開上・五一三〜五一四頁）

あて宮への強い執着を残した仲澄の魂は、まだ救済されていない。仲澄の存在は、死後もなお、物語世界に深刻な暗い影を投げ続けている。

注

（1）仲忠と仲澄の対話については、拙稿「会話の方法」『うつほ物語の世界』（二〇〇二年、風間書房）でも論じた。

（2）仲澄の死は、『竹取』の石上中納言のそれの焼き直しという側面があろう。室城秀之「うつほ物語の方法―仲澄の死をめぐって―」『物語研究』第一号（一九七九年四月）参照。

（3）「内侍督」では、絶命したはずの仲澄や出家したはずの仲頼が宮中に姿を見せており、大きな矛盾がある。野口元大『うつほ物語の研究』（一九七六年、笠間書院）が解くように、成立上の問題があるか。

*『うつほ物語』の本文の引用は、室城秀之『うつほ物語 全』（一九九五年、おうふう）により、適宜表記を改めた。

キーワード：うつほ物語、仲澄、あて宮、仲忠

Abstract

Aspects of Nakazumi's story of Utsuhomonogatari

Oida Haruhiko

The courtship episode of Utsuhomonogatari features a number of unique individuals. Many of them were ruined by the grief of Atemiya's marriage to the Crown Prince. But Minamotono Nakazumi was the only one who actually died. He was Masayori's seventh son, his mother was an imperial princess. He was a promising young man. But his tragedy began when he fell in forbidden love with his half-sister Atemiya. From his first appearance in the story, he was gripped by melancholy. He composed many wakas trying to hide his love for her. He often composed wakas about scenes in which his overflowing tears become rivers. Nakazumi befriended Nakatada and they became brothers-in-law. Their conversation is witty and sophisticated, quoting Waka and Chinese poetry. They grew closer, but finally Nakatada did not realize the truth of Nakazumi's love. Nakazumi finally died, grieving over Atemiya's marriage. Even after his death, he appeared in her dreams. His presence casts a dark shadow over the story.

Keywords: Utshomonogatari, Nakazumi, Atemiya, Nakatada